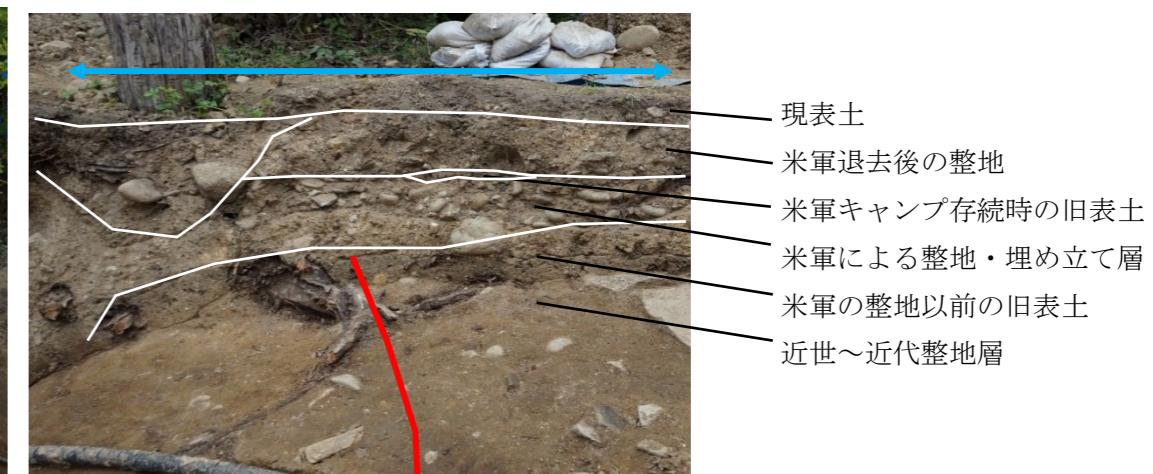


## 2. 検出された遺構

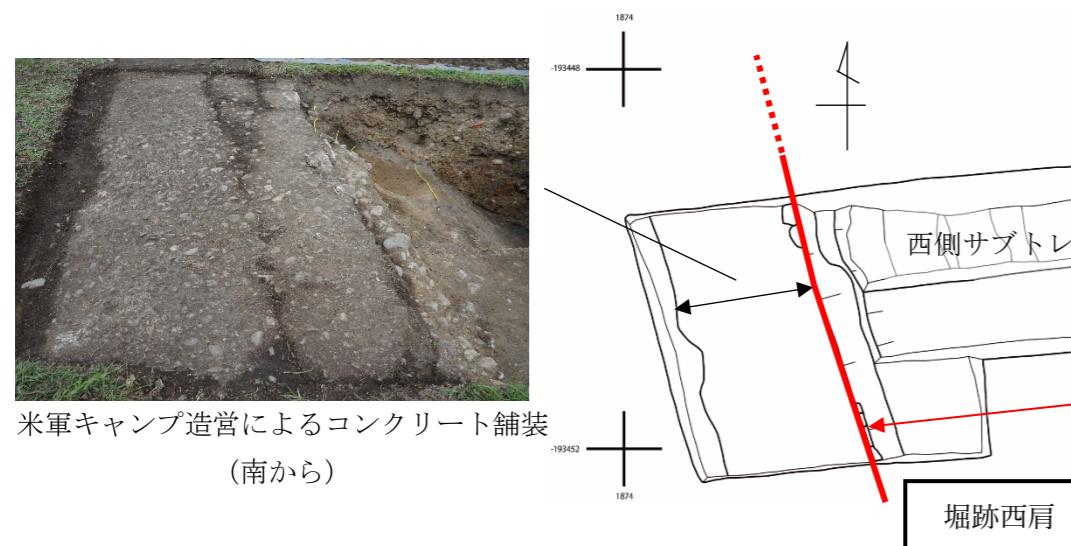
- 中島池から大手門北側土壠の方面に延びる堀跡を検出。
- 平面での規模の確認の後、東肩・西肩の一部でサブトレーンチを設定して深堀し、断面を確認した。
- 規模：幅約 15m、深さ 1.8m 以上（底面未検出）
- 戦後の米軍キャンプ設営時に埋め立てられたと考えられ、現表土の直下まで埋め立ての土が及んでいる。
- 堀跡西肩上部にはコンクリートの舗装が確認されており、玉石で基礎が構築されている。この基礎が、米軍による埋め土に覆われていることから、米軍キャンプ造営による舗装であると考えられる。



第2図 第3次2区 全景 (南東から)

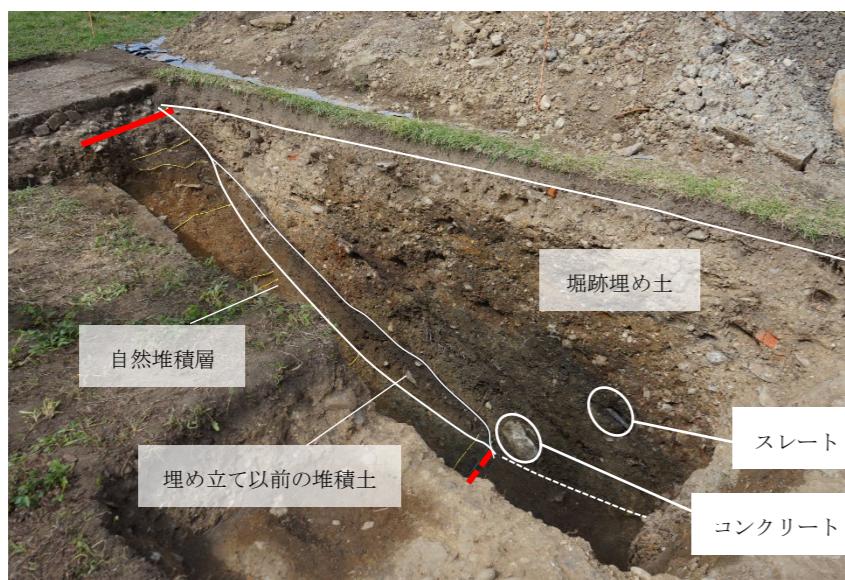


第3図 堀跡東側北壁 基本層序



第4図 2区平面図 (1/80)

- 西側サブトレ
- 現表土の直下まで堀跡埋め土がおよぶ。
  - 確認されている埋め土の下部からは、コンクリート、スレート、鉄棒等が確認されている。
  - 堀の壁面に沿って、堀が存続していた頃の堆積土が確認されている。
  - 堀の側面では自然堆積土が確認されている。

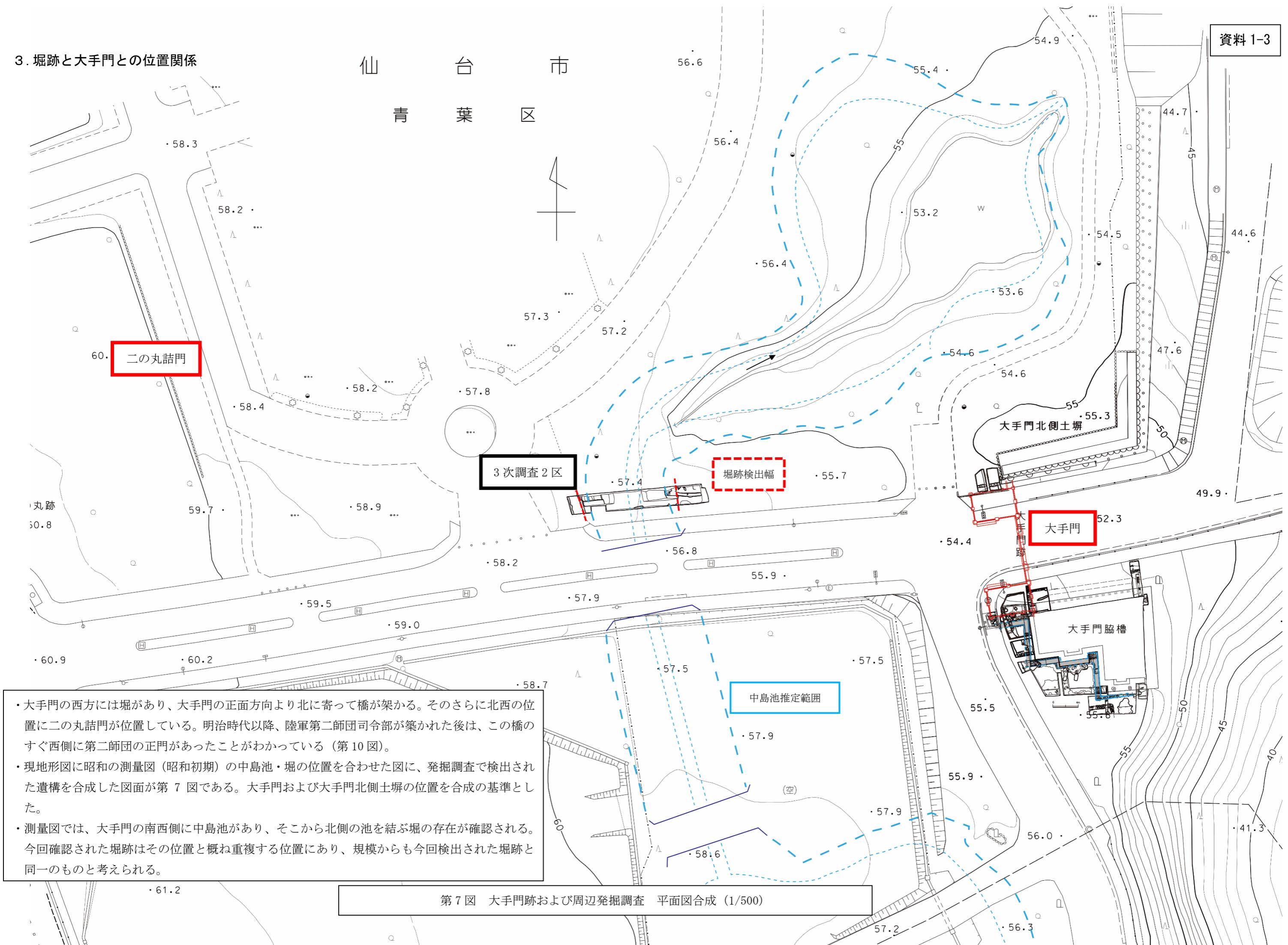


第5図 堀跡検出状況：西側 (南東から)

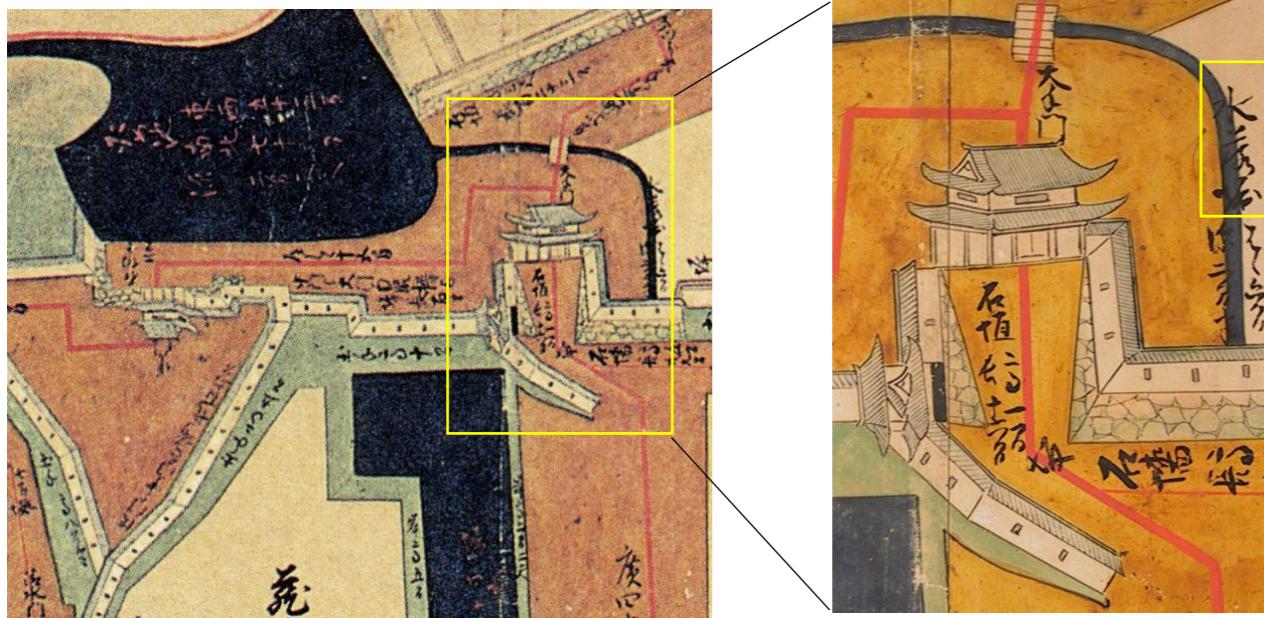


第6図 堀跡検出状況：東側 (南西から)

## 3. 堀跡と大手門との位置関係



## 4. 史資料における堀跡の様子



第8図 『奥州仙台城絵図』(正保2年(1645))(仙台市博物館蔵)

- ・仙台城と城下町を描いた現存最古の絵図。
- ・仙台城最古の絵図でもこの堀が描かれており、「水落堀」との記載がある。
- ・堀の規模が「幅六間 深二間半」とある。1間6尺と仮定すると幅約18.18m、深さ約4.55mである。

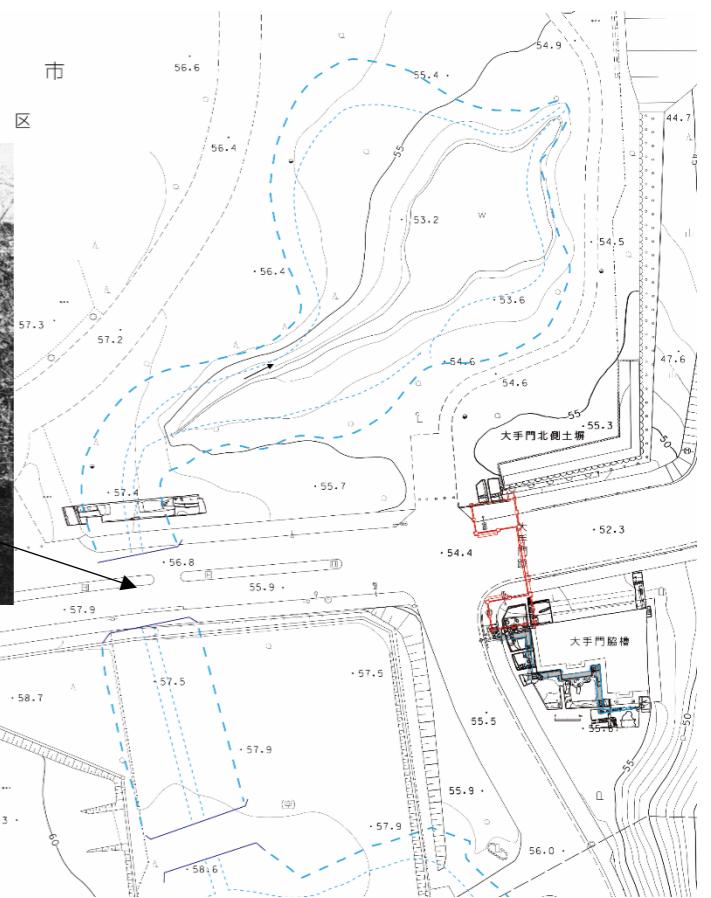


第9図 『仙台城普請窺絵図』(享保6年(1721))(仙台市博物館蔵)

- ・風雨で本丸の懸造の付近の石垣や、東丸や二の丸の土手が崩れたことをうけて、その修復を願い出た際に作成されたもの。
  - ・大手門と詰門の間の「水落堀」の土手が崩落したという記載がある。
  - ・そのほか中島池(溜池)からの水流に関する被害や、その対策についても記載されている。
- (仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』)(傍点を加筆)



「詰所門跡ニ在ル現第二師団司令部正門」  
(仙台市歴史民俗資料館所蔵 絵葉書)



第10図 第二師団期の大手門奥の状況

- ・大手門とは別に、さらに西側に設置されていた司令部の正門の様子。
- ・東側から撮影したものと見られ、司令部正門の前面(東側)に橋がかけられており、その下に堀状のくぼみが南北に延びている様子が窺える。
- ・大手門から延びる道に対して、橋の方向がやや南側に傾いている様子が確認される。

## 5.まとめ

- ・今回の調査で検出された堀跡は、絵図・測量図で確認されるに大手門の西側に築かれた堀跡と同一のものと考えられる。
- ・この堀跡については、絵図でも江戸時代を通して描かれており、昭和の測量図や写真でも存在を確認できることから、大手門焼失時まで存続していたものと考えられる。大手門焼失後、二の丸一帯が米軍キャンプとなった際に、埋め立てられたものと考えられる。
- ・絵図の中の記述では、この堀跡の部分に「水落堀」という記載が見られる。仙台城を描いた最古の絵図(正保2年)から、その後の時期の絵図にも同一の記述が通じて確認される。そのため、今回の調査で検出された堀跡は、この「水落堀」と同一のものと考えられる。
- ・絵図にはこの水落堀を含めて、橋の修復や、水落堀の水が流れる先の工事の記述などが確認される。こうした史資料の調査を行うことで、堀の機能やこの周辺の水系についてさらに検討を進めていきたい。